

四万十市新庁舎 外観イメージパース

四万十市は、室町時代に前関白一条教房が家領幡多荘園の回復を図り、京の都を模してまちづくりを行ったと伝えられ、緑の山並みにつつまれ清流沿いに佇む、街の風情はまさに、土佐の小京都である。そのような歴史をふまえ建物は和風をイメージさせる落ち着いたデザインとし、勾配屋根の採用、自然な土塗調の壁面、水切の採用とし、小京都にふさわしいデザインとする。
又、四万十川の風景を感じさせる石積み壁も設け、地域固有の景観もデザインに取入れ地域に馴染む外観とする。



エントランスホール イメージパース

エントランスホールは、庁舎の玄関であり、又、市民の為のコミュニティーの場でもある。
庁舎を訪れた人々がまず目にするのが、壁面にある四万十川の清流をイメージさせる石や木のモニュメント
天井には、四万十の桧で造った肘木や土塗調の壁とし、明るく四万十市らしい地域性を感じさせるイメージとなる。



7階議場 イメージパース

議場は、市制運営に於いても、重要な役割を担う場所である。
その空間は木目調を基本とした、落ち着いたデザインとし、又、天井を一部折上げ天井とすることにより
崇高な空間が使う人の気持ちを打ち、豊かな発想や意見の生まれる場となる。

